

アフリカの人々と名付け 31

新たな社会秩序と名前

小馬 徹

創造的過程としての包摂と名前

前回見た通り、キプシギス人プロテスタント信徒は、祖霊名の廃止を一応放棄した。祖霊名は、氏族の世代を越えた一体性を適切に象徴する。キプシギス社会が今も父系氏族原理を基盤とする以上、祖霊名の容認は新しい信仰が社会に受け入れられる前提だと気付いたのだ。

それは、彼らの信仰と伝統的価値とが、ひとまず均衡したことを意味する。重要なのは、キプシギス人プロテスタントたちが自らの信仰の深化を目指した結果、伝統的な社会・文化への洞察と理解をも深めた事である。今後も、伝統的な価値への親和と反発という二つのベクトルの併存が予想できる。信徒の対応も分かれよう。実際、まだ微力だがキプシギスにも複婚を認める宗派が生まれつつある。そこには、伝統文化の或る側面の再評価と、それをキリスト教の信仰に包摂する試行を見いだせるはずである。

包摂の過程と運動

植民地化や独立以降の状況への積極的な対応には、包摂される側が新しい制度を伝統の枠組みで再解釈して内化する過程が見られる。キリスト教の受容は、往々伝統的な価値の再解釈を積極的に取り込んで、創造的な展開を見せる。純粋に聖書を再解釈する場合にも、その発想と思考は決して各民族の歴史から自由ではない。概して、伝導団は人々の日常生活における現実的な諸問題に目を向けようとはしない。だから、人々は独自の信仰を掲げて敵対する事がある。無論、人々の名付けのあり方もそうした運動に際して重要な文化表象の一つとなる。

それは、何も独立教会の運動に限らない。カソリック教には、教義それ自体の中に地域的特殊化に結び付く独自の要素がある。「キリスト

教徒の血は信仰の種」と見なし、殉教者を崇敬する殉教の思想がそれだ。キリシタンの激しい弾圧は「日本26聖人」を生んだが、アフリカでもマダガスカルとウガンダで多くの殉教者を出した。ウガンダの22聖人は、1969年、列聖して殉教録に記名された。彼らの名前は、ヨーロッパ的な聖人の名前に代わって子供たちの洗礼名となっているだけでなく、キリスト教のアフリカ化を促す重要な文化表象にもなっている。

ザイール人と洗礼名

このように、敬虔なキリスト教徒でさえも往々ヨーロッパ的な名前を排除する。1957年にガーナが独立を果たして以来、アフリカでは脱植民地化に伴って、様々な動機から諸々の地域で名称一般のアフリカ化が図られて来た。

その典型的な例は旧ベルギー領コンゴである。1960年にコンゴ民主共和国として独立すると、政権を掌握したモブツは1971年に国名をザイール共和国に変えた。彼は「真正化計画」を推し進め、町の名前を初め、歴史的・地理的に重要な陸標の名称を次々にアフリカ化した。ザイールは1908年まではレオポルド二世の私領だった。彼に囚む首都レオポルドビルの名はキンサシャに、また冒険家M. スタンレーに囚むスタンレー峰はンガリエマ山と改称された。

最も象徴的なのは、エリザベスビルがルムンバシと改名された事だ。後者は、ザイールの現代史における最初の政治的「殉教者」であるパトリス・ルムンバに囚む改称である。モブツ自身もヨーロッパ的な名前を捨て、閣僚たちにも彼に倣うように求めた。因みに、彼のフル・ネームは、Mobutu Sese-S'eko Kuku Ngbendu Wa Za Banga となった。

ザイール化政策の影響は、庶民の洗礼名にも

及んだ。1972年にモブツは大統領令を出し、ヨーロッパ的な洗礼名を禁じた。自分自身で付けると言う意味での個人名である「自称」（つまり「吾称」、連載第16回参照）が、その代用とされた〔梶茂樹「テンボ族における人名の特徴」『季刊人類額』16(2)、1985〕。

モブツを西欧の傀儡と見る論評は数多い。だが、*African Confidential* 誌 (vol.13, no.7) は当時こうした事態を次のように評している。「改称は、モブツ自身と彼の国をその過去から切り離し、(望まれている) より明るい新たな未来を建設するべく彼が進める、政策の一部となっている」〔Madubuike, I., *A Handbook of African Names*, 1994 (1976)〕。

アフリカ諸国の独立後、ヨーロッパ人に因む地名の多くはアフリカ化された。中でもモブツは、一国の元首として、人名に及ぶまで徹底的にこの政策を推し進めた点で特記される。

アフリカ名への復帰

ヨーロッパ的な名称の使用を止めることは欧米から距離を置く事、特に植民地状況からの離脱への志向を象徴する。モブツの徹底ぶりは異例だとしても、個人次元では類例も多い。

ガーナでは、詩人で小説家でもあるジョージ・アウォノール＝ウィルソンが、人生の半ばでコフィ・アウォノールに、またアフリカ合衆国を夢見たガーナの政治家、フランシス・ンクルマはクワメ・ンクルマへと名前を変えた。

数ある中でも最も劇的なのは、ケニアのジェームス・ジョングがギユク人としての意識に目覚めて、ングキ(グキ)・ワ・ジョングに復帰した事であろう。その契機となったのは、1970年にナイロビで開催された東アフリカ長老派会議での招待公演だった。彼は、キリスト教がアフリカに破壊的な影響を与えたばかりか、アフリカ人キリスト教徒も植民地主義に加担したと述べた。激怒した長老の一人が立って、彼の個人名は洗礼名だと論難した。「グギが、アフリカの無垢な土俗性にその根っこがあること

を断言したのはこの直後のことであった」〔宮本正興「グギ・ワ・ジョング小伝」、グギ・ワ・ジョング『アフリカ人はこう考える』1985〕。*Oxford African Encyclopedia* (1976) は、「彼の作品の多くは部族的・人種的葛藤とそれに起因する個人の悲劇を描いている」と評している。

様々なスタンス

こうした事例と対照的なのは、ニアサランドを独立に導いた民族運動の指導者ヘイステイングス・カムズ・バンダである。彼のマラウィ政府は、他のどのアフリカの国々よりも緊密に南アとの経済的な紐帯を保った。それは、欧米の文化に対する彼の姿勢にも通じている。彼は、自分自身の個人名として、伝統的な尊称と共に洗礼名を維持したのである。

ケニアの初代大統領ケニヤッタの事情は、もっと複雑だ。カマウ・ングキはジョンとピーターとの二つの洗礼名を得たいと望んだ。そこで、聖書の中に因んで後者を石に変えてジョンストンの名を創造し、ジョンストン・カマウとなった。彼はやがて、愛用のベルト(キニヤタ)に因んでケニヤッタの愛称を得る、民族運動に挺身する頃には、ケニアの子の意味の自称だとしてジョンストン・ケニヤッタを称した。だが後年英国で社会人類学を学び、ギクユ社会を描いた研究書 *Facing the Mount Kenya* (1938) を出版する際に洗礼名を捨て、ジョモの名を作る「丹埜靖子「もらった名前・選んだ名前」、松本脩作・大岩川嫩『第三世界の姓名』1994〕。

現代アフリカでの個人名の変化を事例に則して考察すると、新たな政治・社会状況での地位と権力の分配に密接に関連している事が分かる。名前は、やはり些細なラベルではなく、心理や社会行為の次元で深く作用する。それが作り出すイメージは、それに続く現実、更にはその一部である自分自身を導き出す力なのだ。

〔本稿脱稿後、モブツ政権が瓦解した〕。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)